

2026年9月20日 敬老感謝

説教題『主が共におられたので』創世記 39 : 16～23 ～創世記⑧～

主任牧師 加藤 誠

「しかし、主がヨセフと共におられ、恵みを施し、看守長の目にかなうように導かれたので…」(創世記39章21節)

優れた才能や賜物は人に大きな可能性を与えてくれます。しかし豊かな才能や賜物がそのまま輝かしい将来を約束するわけではありません。その才能を磨くにふさわしい訓練が必要ですし、本人自身の努力も求められます。さらに、その才能や賜物が神の働きに用いられるためには、神による訓練が必要なのです。

ヨセフは優れた知恵と賜物を神から与えられた若者でした。彼に与えられた「夢を見、夢を解く知恵」は「神の知恵」という特別な才能です。しかしその優れた知恵と賜物が神の働きに用いられるためには、神による厳しい訓練が必要でした。

ヨセフは 10 人の兄たちの弟でありながら、父ヤコブの寵愛を受け特別扱いされて育ちます。37 章 2 節には「ヨセフは兄たちのことを父に告げ口した」とあります。これだけでもヨセフがどれだけ兄たちから嫌われたかが想像できます。さらにヨセフは神から夢が与えられたとあって、将来父や母も兄たちも皆が自分の前にひれ伏し拝むようになるかと得々と語ります。そんなことを語れば兄たちがどう思うか想像がつくはずですが、特別扱いが当たり前だったヨセフは人の気持ちをおもいはかる感性のない、鼻持ちならぬお坊ちゃまでした。これではいくら神から優れた賜物を与えられていても神の働きには用いられません。ヨセフは神の厳しい訓練を受ける必要がありました。

今朝の 39 章には、兄たちによって奴隷商人に売られ、エジプトに連れてこられたヨセフが味わうことになった理不尽な出来事が紹介されています。ヨセフはエジプトの王の侍従長ポティファルの家で奴隷として誠実に働き喜ばれますが、その妻の意に沿わない行動をとったために「でっちあげの罪」で監獄に入れられてしまいます。ヨセフは何一つ悪いことをしていないし、誠実を尽くしてきたのに、刑罰を受けさせられていく。なんとも理不尽なことです。しかし「主がヨセフと共におられたので」(21 節)、ヨセフは牢獄の中でも守られた…というのが今朝の個所です。

この個所から私たちは何を学ぶことができるのでしょうか？

第一に受けとるのは「神を畏れる信仰」への励ましです。この場面でのポティファルの妻の罪への誘惑に対するヨセフの凜とした行動に「神を畏れる信仰」がはっきりと見えます。力と富を持つ者の不正への誘惑に対して明確に NO を示す、神の正しさに踏みとどまる強さ。ヨセフはお坊ちゃま育ちでありながら、その心の真ん中に「神を畏れる信仰」が生きていたのです。豊かな才能以上に第一に私たちに必要なもの。それは「神を畏れる信仰」です。ヨセフはエジプトで奴隷として主人に仕える身となりました。かつて父の寵愛を受けて長い衣を着ていた時とは真逆の立場です。奴隷は主人の言葉に逆らうことが許されません。自分の意に沿わないことをしなければならぬ立場で、毎日悔しい思いを味わったことでしょう。しかし、そのような中でもヨ

セフは「神を畏れる信仰」を失うことなく、むしろ強められていったのです。私たちが生きている社会にはすぐ身近に不正への誘惑が潜んでいます。富や力を持つ者の言葉は強く、私たちを罪にいざないます。そのときに「神を畏れる信仰」をもって、しっかり向かい合っていく強さを、ヨセフの姿から学びたいと思うのです。

二つ目にこの場面から示されることは「監獄の中にも主はおられる」ということです。39章には「主がヨセフと共におられたので」という言葉が四回も記されています。奴隷になったヨセフ、監獄に入れられたヨセフと「主が共におられたので」とわざわざ聖書は書いています。権力を持つ者の嘘が「真実」とされ、無実の奴隷がどんなに真実を叫んでも握りつぶされる。これは三千年前だけでなく、私たちが生きている社会の現実でもあります。金と地位を持つ者の言葉がもてはやされ、力を持たない者の声は無視される。これが人間の世界です。しかしその監獄の中に主はヨセフと共にあって、その主によってヨセフは守られるのです。もっとも私たちが生きている現実には残念ながらヨセフのようにはいかない。「神さま、あなたはどこにおられるのですか?」と問わざるを得ないことが多いわけですが。しかしながら十字架の主イエスは「人々が目をむけようとしない監獄の中に主は生きて働かれる」という神の真実を示されました。十字架は「呪われた木」であり、人々が「神の子がいるわけがない」と考えた、その十字架のただ中に「主はおられる」。暗闇覆うこの世界の「ただ中におられる主の真実の働き」を見つめていく信仰と勇気をいただいきたいのです。

そして三つ目にこの箇所から教えられるのは「ヨセフを神の働きの器とするための神の厳しい訓練」です。ヨセフはこの39章から40章にかけて、奴隷の苦労を味わい、理不尽な体験を重ねます。人間の社会は、悪意の塊のような権力者の理不尽がまかり通り、「自分だけ幸せならよい」と他者への恩を忘れてしまう人たちも多いわけですが、ヨセフは心折れる出来事一つ一つの背後に「共におられる主の恵み」を体験する中で、「神を畏れる信仰」と「どんな困難の中にも共におられる神への信頼」を学んでいきます。そしてヨセフは「なぜ自分がエジプトに奴隷として売られて、でっちあげの罪で監獄に入れられ、さらには監獄で命を助けた人が恩知らずなために監獄から出るのが三年も遅れてしまった」、その理由を「神がご自分の働きのために自分を訓練し導いてくださったのだ」と受け止めていくのです。ヨセフ物語の最後の最後に、兄たちとの和解に導かれたヨセフはこう語っています。「大飢饉という危機を乗り越えさせるために、神がお兄さんたちに先だって、わたしをエジプトにお遣わしになったのです。だから、もう罪を思い起こす必要はありません」と。ここに自分の人生を神を主語にして語りながら、神の訓練と導きを感謝し、自分に与えられた才能を神の働きのためにささげる者とされたヨセフの姿が見えます。ヨセフは「自分の成功を得々と語る生き方」ではなく「神の働きに自分の才能をささげて、多くの人々の幸いのために働く生き方」に導かれたのでした。私たちと「共におられる主」は、与えられた才能と賜物を、世界の隣人の中で正しく用いる道を教えてくださる主なのです。

敬老感謝の時、私たちの教会に「主が共に歩んでくださる人生の幸い」を体験されてきた、おおぜいの信仰の先輩が与えられていることを心から神に感謝したいのです。